子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2002年9月　NO.109

「タケストリー」　長田純子

〈もくじ〉

高知医科大学の現状と将来像……池田久男　2
祖母のことば……中埜由季子　3
文化について　その三……西澤邦輔　4～5
長崎出張……マスダマッペイ　6～7
IT社会の新しいコミュニティについて②……川村晶子　8～9
土佐の一絃琴……近森律子　10～11
ぼくが父親になったとき……佐藤伸治　12
地域社会の再生と地方自治㈠……根小田渡　13
風俗歳時記・風伯……14～15

(財) 高知市文化振興事業団

高知医科大学の現状と将来像

池田久男

国立大学の統合・再編や法人化の問題が大きく報道されています。平素より高知医大の発展を温かく見守って下さる県民・市民の皆様から、高知医大はどうなるの?、高知医大の将来は大丈夫なの?、とご心配や励ましの言葉をいただくことがしばしばであります。高知医大の現状と、予測可能な将来像について紹介するとともに、将来のあるべき姿について私見を述べさせていただきます。

高知医科大学が昭和五十三年に第一期生を受け入れて以来、今年で二十四年が経過し、本年三月には十九回目の卒業式を挙行しました。この間、本学を卒業した医学生は千八百二十二名で、平成十年に開講した医学部看護学科の第一期生六十二名も今年初めて卒業いたしました。

本学の教育組織は、十一学科目、医学科二十五講座、および看護学科三講座で、教職員の総勢は八百九十三名にのぼります。上記のほかに、博士課程と修士課程の大学院医学系研究科が実働しています。医学部附属病院には十八診療科と十一の中央診療施設があり、一日平均八百九十名の外来患者さんと、五百五十名の入院患者さんが利用して下さっています。もちろん、そのほとんどは高知県内の各地から来院された患者さんであります。

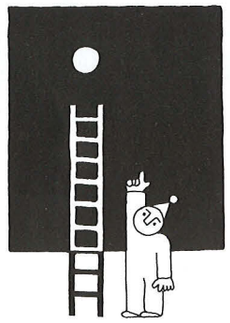
本学の将来計画で、現在までに確定的と申し上げて支障ないものを紹介いたします。

第一は平成十五年十月を目途に、高知大学と統合いたします。つまり十五年九月末に二つの大学は廃校となり、十月より両校が統合して新大学として発足するのです。目下、その準備が着々と進んでいます。新大学の校名などは未定ですが、いずれにせよ、現在の高知医科大学はなくなり、新大学の医学部として生まれ変わります。したがって、大学としての機能、つまり学生教育、研究、診療は現状と大きく変わることはありません。地域の皆様ともっとも深いつながりのある附属病院が、新大学の附属病院となるのか、新大学医学部の附属病院になるのかは、現在未定ですが、病院としての機能に大きな変化はありません。

第二は国立大学の法人化の問題で、平成十六年四月から、全国の国立大学すべてが法人化されます。高知大学と統合・新生した新大学も、わずか半年後に、法人化しなければなりません。この法人化の問題は、別の機会に改めて述べさせていただきます。

学長として、本学の将来像について私見を述べさせていただきます。

本学が昭和五十三年に、県民の大変なご苦労とご努力の結果、単科医科大学として岡豊に誕生することができたことは、当時の記録から明らかであります。当時の中内高知県知事は、第一回入学式の祝辞の中で、「医大は県民の悲願であった。ここまでくるのは大変だった。難産で生まれた子は健康に育つといいます。県民の期待にこたえて良い大学になってほしい」とその心境を語っておられます。私自身、高知医大に赴任して、医育機関（医療人を育成する大学）の存在が、その地域の住民の健康や福祉に、いかに大きいかを実感しました。



私は、名前や組織形態がどのように変更されようとも、高度先進医療の担い手、医療人の育成・再教育・生涯教育、災害時医療センターなどの役割をもって地域に貢献する、医育機関としての大学は、今後も末長く発展し続けなければならないと思っています。県民・市民の皆様の温かいご支援をお願いいたします。

（いけだひさお／高知医科大学学長）

祖母のことば

中埜由季子

庭の土をじかに、素足で歩いてみる。足裏につめたい砂利が快い大地に立ち、炎暑のなか、樹々や草花に水やりをする。

「ちいさな草も生きちゅうがやき、摘んだら可哀相ぞね」

ふと、今は亡き祖母の言葉を想い出す。

私がまだ五、六歳の頃、萌え初める草若葉か何かで遊ぶのをそっとたしなめたおばあちゃん。

祖母は私が十三歳の時亡くなったけれど、四十数年経た今も私は彼女のやさしい声と面影が忘れられず、常に肩か耳のあたりにそれを感じつつ生きている。

高校卒業と同時に生まれ故郷の高知市を出て大阪の大学に学び、結婚後京都に定住すること三十年。必ずしも平穏な日々とは言えないが、何かの拍子に心のひだを縫って、ハッと祖母の顕つことがある。思わず背後を振り向くほどに、祖母のことを思うのは何故だろう。

世のため人のためになることをせないかん、と鏡川の土手道を塵を拾って歩いたおばあちゃん。終戦直後の空腹がちのころ、林檎やみかんが手にはいると周囲の人に「どうぞ、どうぞ」と配っていた後ろ姿も忘れられない。

ある日のこと、多分私は七、八歳だったと思うが昼の道を急いでいた。

「どこへゆくがぞね?」

声の方を振り向くと、偶々すれ違ったらしい祖母が、分家の孫の守りをしながら心配気な眼差しで私を見ているではないか。

「ちょっとそこまで」

幼い私は何か用を持っていたのだろうか。自分でも覚えていないが、再びひとりスタスタと歩き続けたことを記憶している。

今思えば、祖母はあの時、あの子はどこへ行くのだろう、大丈夫だろうか……と、初孫の私の後ろ姿を、その将来をも重ねて見つめていたのかも知れない。

意識しない無意識の世界がある。半世紀近く経た今もなお、かくも無意識のうちに祖母を、時には祖父を感じている身が不思議でならない。

もしかしたら、極楽浄土で私のことを心配しているのかしら。

私は、語りかける。

おばあちゃん達、安心して下さい。三年前の夏には夫や子どもを連れて高知に帰ってきました。お陰さまでその折、御恩のある短歌誌『海風』主宰・国見純生先生に念願の御挨拶もできましたし、旧友や二人の叔母や親族一同に温かく大歓迎され幸せな数日を過ごしたことでした。ああ、祖父母に私の二人の息子を見てほしかった。彼らは京都生まれなのに友人からこう言われるそうです。

「きみの京都弁何となくおかしいえ」

息子は答える。

「土佐弁がまじってるんや。お母さんに土佐訛を、刷り込まれてしもたんや」

チリリンリン、チリリンリン。

素足で朝の庭を歩けば早くも、草蔭に虫の声が聞こえる、祖母の懐のように豊かな大地は、今日も私に歌をうたわせる。

生ふる芽を摘むなといひし亡き祖母を
恋ほしみて立つ夏の樹下に

（なかのゆきこ／歌人）

文化について その三

西澤邦輔

四　合理的精神

一　文化再建の基礎作業

文化没落のそもそもの責任が哲学の怠慢にあるとすれば、文化再建のための基礎作業も当然哲学が負わなければならないことになる。もちろんこれも、一部の職業的哲学者の責任というわけではなく、哲学的存在としての万人が負うべき責任である。

この文化再建のための基礎作業とは、先ず文化的世界観を確立することであり、その世界観が持つべき必須条件として、シュヴァイツァーは、「思考必然的」・「人生肯定的」・「倫理的」の三つを挙げる。

二　思考必然

彼が、あるべき文化的世界観の第一の条件として「思考必然的」を挙げていることは、彼の哲学の性格が「合理主義的」、換言すれば「理性尊重的」であることを表している。

ところが、一般に「合理的」や「理性的」は、これに賛同する場合も反対する場合も、非常に狭い意味に取られがちである。例えば、合理的と言えば即物的実証可能なことにのみ関わると考えられたり、理性的と言えば感情を理解しない立場であるとか人間らしさを持たない考え方であるとすら見なされかねない。シュヴァイツァーの言う「理性」とは、そのようなものとは甚だ異なって、「理性とは、われらの精神生活の多方面な活動を抑圧しているところの、無味乾燥な悟性ではない。むしろそれは、われらの精神が生き生きと協同的に活動するところの、そのあらゆる機能の総体を指す」（石原兵永訳）のである。

理性の限界を自覚するのも実は理性の働きであり、理性を超える働きについても理性がその真理性を見張らなければならない。それゆえ、理性の及ぶ範囲は、人間のなす精神活動すべてにわたるこの上もなく広いものであり、そのようなものこそ理性の名に値する理性である。このような意味での理性は、いかなる場合にも放棄してはならない。これを放棄することは、人間が人間としての誇りと責任と存在価値を放棄することに他ならない。

三　情報と理性

自分を納得させるためには自分の理性に訴えなければならない。その上で、他者を納得させるためには、その他者の理性に訴えなければならない。そのように、一人の理性から他の一人の理性へと納得させつつ伝達されるもののみが、価値あり力あり永続的な思想となる。それ以外の方法、理性の吟味と納得を経ないで熱病的に大衆化されてゆくものは、その内容の如何にかかわらず、それ自体すでに不健康であり、人格破壊的であり、非文化的である。

理性は個人が持つものであって集団が持つものではないがゆえに、集団の意志が個人の意志に先行支配するところでは常に、理性が抑圧を受け、それゆえに文化が没落してゆく。

十九世紀以降、理性に対する信頼が急速に衰退したために、その当然の結果として、諸国民の真理感覚は情報や宣伝に対して急速に抵抗力を失った。例えば、理性によっては真理であると証明されえないことが、民族や国家の歴史に照らして真理であると証明され、単純にそう受け取られることになったのである。

日本の敗戦直後の価値観喪失虚脱感と価値観探求焦燥感の中で出合った印象深い言葉の一つに、出所は日蓮の「法が国によって立つのではなく、国が法によって立つ」がある。これは、すべての価値の帰するところが「忠君愛国」であり、それゆえによかれあしかれ道徳にも教育にも活力があった時代風土の中で成人した者にとって、俄には呑み込めない言葉であったが、それだけに衝撃的であった。

国家が価値の付与者・価値の終点であり、すべてのものがこれによって価値を保証されると、国民の大部分が真面目に考えていたのは、ある時代の日本ばかりのことではない。類似のことが十九世紀以降の国民国家の諸国民に広く見られたのである。このことを考えさせてくれたのも、シュヴァイツァーの「文化哲学」であった。しかもこのことが今日、必ずしも過去のこととして終了しているわけではないとすれば、事柄の根は深いと言わざるをえない。

四　十八世紀合理主義

もう一つ、シュヴァイツァーが合理主義的精神であることを端的に示すものがある。彼は、人類の哲学の歴史の中で最も範とするに足るものは十八世紀西洋の合理主義哲学であり、それゆえ我々が文化の再建を求めるならばそこにまで立ち返って出直さなければならない、と主張しているのである。

そうして、その時代精神の偉大さを証する一例として、彼が挙げる逸話が、すこぶる彼らしい。その時代特有の無数の秘密結社の存在と活動を挙げるからである。

秘密結社と言えば、現代人は直ぐに政治的野心によるものと想像するであろうが、全くもってそうではない。むしろ、一人一人が、平凡な生活と職業活動の中で、密かに黙々と、合理的人道的理想の実現に向かって最善を尽くし、互いに激励指導し合う結社である。無名の中に慎ましく、しかも雄大な理想に生きる人々、集団の力に依存しない自由な人々の見えざる集団である。それこそが社会における本当の倫理的エネルギーであり、それゆえに本当の建設的エネルギーであり、そのような活き活きしたエネルギーが社会の全般にわたって見えざる多数を占めていたからこそ、十八世紀西洋は社会のあらゆる面において人道的進歩改革が次々と音も立てずに実現していったのである。「十八世紀合理主義哲学の偉大さは、手にタコができたということである」と彼は言う。

そう言えば、ゲーテの「ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代」の中に、このような秘密結社の存在を思わせる描写が各所にあったように思う。読んだときには、それは詩人の単なる空想とばかり思っていたが、実は現実的なモデルがあったのであろう。今思えば、あの作品の背景にある社会と人間はいかにも若々しく、進歩と向上への意欲に満ちていた。一見意外の感を与えるが、シュヴァイツァーはゲーテを非常に高く買っていたのである。

五　価値の基礎概念

一　人生肯定と倫理

シュヴァイツァーは、前述した文化的世界観の持つべき三つの必須条件を同時に満たす基本概念を求めて苦闘する。

「思考必然的」であって同時に「人生肯定的」であることは、至難である。その単純な証拠が二つある。一つは、人は他の生命を犠牲にしなくては一日も生きられないこと。野菜といえども生命である。この生存そのものの罪悪を言い逃れることはできない。いま一つは、人は無限永劫の宇宙間にあって瞬時の、しかも微細な宇宙的変化によって消滅する生物であること。それゆえ、人類存在を客観的に意義付ける方法はない。

「人生肯定的」と「倫理的」も容易に両立できない。倫理的であろうとすると人生否定的へ傾き、人生肯定的であろうとすると非倫理的もしくは超倫理的へ傾くからである。

二　「生への畏敬」

苦闘の果てにたどりついた倫理の基礎概念は「生への畏敬」であった。しかし、ここが彼の哲学の終点ではなく出発点であった。「生への畏敬」は、生そのものと同じく、大きな矛盾を抱え込んだ概念だからである。避けられぬ「生命の犠牲」に対する責任の取り方が、彼の哲学の、彼の生涯の生き様を賭けた、最大テーマである。「疚しくない良心は悪魔のものである」と彼は告白する。

〔完〕

（にしざわくにすけ／清和学園理事長）

長崎出張

マスダマッペイ

地味な仕事はしていても、年に数回は出張に出かけなければならない。ほとんどが春と秋に集中しているため、旅好きの部長などは「今度は○○の桜が楽しみだ」とか「今なら○○の紅葉がきれいだろう」と言いながら、ウキウキと出かけてゆく。何しろ日本全国の地図も時刻表もほとんど暗記しているぐらいで、旅が楽しくてしようがないらしい。

そこへいくと僕は出張と聞くだけで身体中を悪寒が走り、出かけるまでの毎日が頭に何か重いものをのせているようで気分が滅入ってしようがない。外見は逞しくて行動的なので「犬型人間」と見られているが、こと旅行となると僕は全くの「猫型人間」に変身する。

今回もとにかく逃げて逃げて逃げ回ったが、しかし遂にその努力も空しく、九州まで出張せねばならなくなった。行先は長崎である。

長崎と聞いたとたんに、原爆と隠れキリシタンという恐ろしくも哀しい思いが心をえぐったが、しかしまた異国情緒に溢れた歴史の古い町という思いも心に浮かんだ。

部長に言われたとおり、早朝博多行きの飛行機に乗り、そこからはL特急のかもめ号に乗ったので、昼過ぎには長崎に着いた。着いたはよいが、宿のチェック・インまでは時間も相当にある。部長ならこの間を利用して市内の名所旧跡を訪ねるのであろうが、そこは旅なれぬ僕のこと。どのバスに乗ってどこで降りたらよいのかさっぱり分からぬ。

することもなく駅前をぶらぶらと歩いていたら、「長崎市定期観光案内所」という看板が目に入ったので、ふらりと入った。ふらりと入って、ふらりと観光バスの切符を買った。これに乗れば市内の主要な所は大体案内してくれるらしい。何という有り難い話だ。

三時間にわたって平和祈念像、国際文化会館、大浦天主堂、二十六聖人殉教地など様々な所を見て回った。ガイド嬢は未だ初々しさの残る新米でときどき案内のセリフを間違えた

が、僕はそこに何とも言えない好感を感じた。長崎のような哀しくも美しい町にはよどみなく雄弁な口調は似合いはしない。三時間後、僕は心の底から彼女に感謝しながら、黙ってゆっくりとバスを降りた。町のネオンがきれいだった。

夕方宿にYさんが見えて、「これから一番にぎやかな所で一杯やりませんか」と強く誘われたが、「酒は飲めませんから……」と言って辞退した。夜は静かで長かったが、僕は宿の窓から外を見つつ昼間見た長崎のあれやこれやを思い浮かべながら、一人でゆっくりビールを飲んだ。

翌日仕事をすませて宿に帰り、すぐ食堂に下りた。目の前のテーブルの上に、赤い柿型の醤油入れが一つポツンとのっていた。なぜかそれにいたく心が引かれた。赤い醤油入れからこぼれる黒い醤油の流れを見たとたん、突然遠い遠い少年の日の思い出が鮮やかに心によみがえってきた。

未だ小学校へあがる前のことであったと思うが、僕は母から空の一升ビンを渡され、醤油を買いにやらされた。

空ビンは軽くても中味の入った一升ビンは少年の手には重すぎたのであろうか、それともビンの外側にも

れていた醤油のために手がすべったのであろうか。どちらとも分からぬが、とにかく僕は醤油ビンを渡されたとたん、つるりとビンを床に落とした。

ビンは割れて、僕の目には黒いダイヤに見える醤油が、ドクドクと音を立てて流れ、土の中にしみ込んでいった。火のついたように泣き叫んだが、醤油の流れは止まりもしなかった。

店のばあさんは同情はしてはくれたが、「あたしに責任はないよ」と言って僕の手から金をとった。割れたビンを提げて家まで帰ったが、母はどうしても許してはくれなかった。僕は母からひどく叱られ、割れたビンを見つめながら、父が帰るまで裏にある柿の木の下で何時間も座り込んでいた。あの時代、僕の家では一本の醤油も哀しいまでに貴重品であった。

僕は赤い柿型の醤油入れが無性に欲しくなって女中さんに尋ねると、「フロントで買えますから」と教えてくれた。帰りは絶対に一つ買っていこう。

その夜またYさんが見えて食事に誘われたが、何しろ今すませたばかりなので、二人でコーヒーを飲んでから別れた。その夜も宿で独りビールを飲んだ。翌日も宿に帰ってから、フロントで赤い柿型の醤油入ればかり見つめていた。

四日目、予定の仕事をすませた僕は、去り難い気持ちを残して長崎を朝早く発った。上りのL特急かもめ号の中で、コーヒーを注文し、その褐色の液体が目の前の紙コップの中にドクドクと注がれるのを見た瞬間、僕はあの赤い醤油入れを買い忘れたのに気がついた。

今も長崎の旅を思い出すたびに、僕はあの哀しくも古く美しい町の姿を、赤い柿型の醤油入れとともに思い出す。

（ますだまっぺい／エッセイスト）

前回は、コミュニティについて書きましたが、今回と次回は、ITを利用した地域コミュニティの一つ『とさはちきんねっと』について、どういうツールを使って交流を図っているのか、ご紹介していきたいと思います。

まずは電子メール。

『とさはちきんねっと』に関するあらゆるお問い合わせは、代表アドレスtosa8kin@mb.inforyoma.or.jpに送っていただくといいのですが、その他、「その道のプロに相談する」といったコーナーで、電子メールを利用しています。

例えば、『Women's道場』内、【婦人科道場】では、レディスクリニックコスモスの坂本院長先生にご協力いただきまして、女性特有の身体の悩み相談室を開いていますが、ホームページ上のフォーム（記入枠）に相談内容を書き込んで『送信する』というボタンを押すと、すぐに坂本先生の元にメールが届けられます。そして、回答は電子メールで返信されます。他の方にも参考になると思われる質問内容につきましては、ご本人の了解を取った上で、ホームページ上に掲載しています。病院に行くまでもないけれど、気にかかる事がある、でも誰に聞いてよいのか悩んでいる……という女性の方、ぜひここで相談してみてください。

その他の道場や、『占いの庭』の【占いコーナー】でも、電子メールで質問を受け付けています。

次にご紹介するのは、どこのホームページでも、コミュニケーションを図る一番手っとり早いツールとして利用されている、掲示板機能。

『とさはちきんねっと』にもジャンル毎に五つの掲示板を用意しています。

掲示板は、一般に略してBBS(注1)と呼びますが、『SOHO研究室』のBBSでは、SOHO事業に関連する方々が集って情報交換や悩み事を相談し合っています。

また、一番アクセスの多い『まりも組』では、北海道から高知に嫁いで来られた〝まりもさん〟が、必ずどの書き込みにも、お返事（レスと呼びます）を返す形の掲示板を用意しています。温かい人柄のまりもさんの反応を楽しみにしている常連さんも増えています。

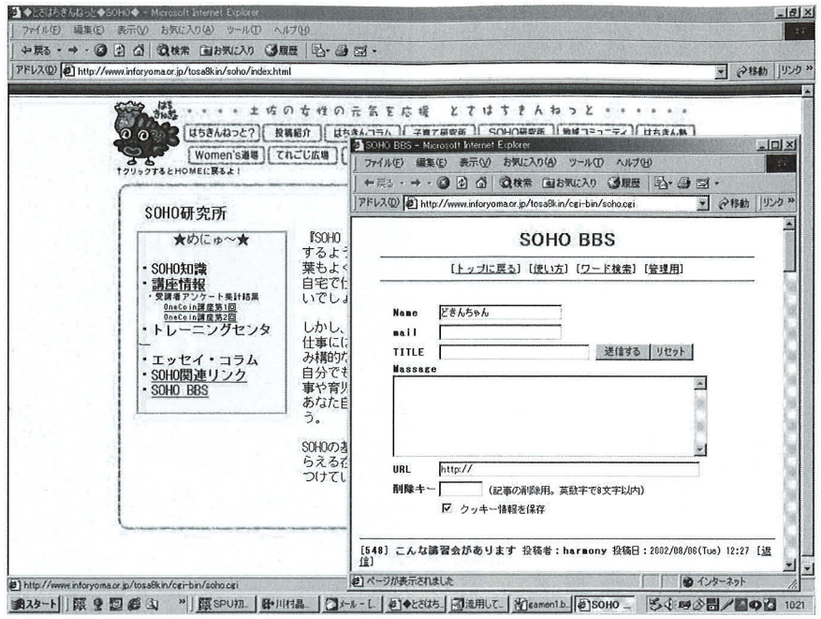
はちきんねっとの会員にならなくても、これらのBBSは自由にご利用できます。（ただし、ボランティアで活動しておりますので、企業等による営利目的の広告掲載等はお断りしております）。

『とさはちきんねっと』にお立ち寄りになられましたら、ぜひ『みんなの掲示板』にひとこと書いてみて下さい。

ホームページには、世界中どこからでもアクセスできます。一昔前には考えられなかったことですよね。コストをかけなくても、世界中に自分の考えを発表したり、広告を出したり、そして友達になろうと呼びかけたりできるのです。しかし、それゆえに起こりうるリスクもしっかりと把握しておかなければなりません。

『とさはちきんねっと』では、皆さんハンドルネーム(注2)でBBSに書き込みをされていますが、個人同士で情報をやりとりされたい方のために、ご自分のホームページアドレスや電子メールアドレスも記入できるようになっています。

ここで、注意!! どんな人から書き込みがあるか分からない、ひょっとするとウィルスを送りつけられるかもしれないということを、十分理解した上で、ホームページにアドレスを公開してください。ただ、ホームページやアドレスだけなら、変な書き込みがあっても削除したり、メールにウィルスが添付されて送りつけられた場合でも、パソコンにウィルスチェック・駆除ソフトを入れておくなどして、ある程度対処・予防ができます。



『とさはちきんねっと』ホームページの『SOHO研究室』の掲示板

しかし、今、住民基本台帳ネットワークでも個人情報保護条例うんぬんが取り沙汰されていますが、自分の住所や本名、電話番号などといった個人情報は、どういう使われ方をされるか分かりませんので、開かれたBBS上には公開しないことをお勧めします。

ちなみに、『とさはちきんねっと』に会員登録していただく際、イベントなどの連絡を行うために、連絡先や本名といった個人情報の記入をお願いしておりますが、いただいた情報は、システムに精通したスタッフが厳重に管理しております。はちきんねっと管理スタッフは数名おりますが、個人データを取り扱うのは二名のみ。名簿が外に出ることはありません。また、ホームページへのアタック（攻撃）がないか、BBSへの不正な書き込みがないかなど、注意深く監視しておりますので、ご安心下さい。

こんなことを書くと、怖くなってしまうかもしれませんが、ネットの社会も、実社会と同じです。自分の身を守る術を身につけ、他人に迷惑をかけぬマナーを心がければ、トラブルに巻き込まれないですむのです。

最近、車内でインターネット接続可能な小型自動車が発売されて話題になりましたが、家電がすべてネットワークに繋がり、携帯電話を使って制御できたりといったことができる住宅も登場しています。こういった、あらゆる生活機器がインターネットに繋がる『ユビキタス(注3)社会』の到来は、そう遠い未来ではありません。

今までは、知らんぷりしていれば触れられずにすんだインターネットの世界が、今後、堰を切ったように、生活の中に入り込んで来るでしょう。ですから、現実社会とバーチャル空間の光と影をしっかりと見据え、ネットの世界を前向きに捉えて活用することが、これからの生活の重要なポイントとなるのではないかと思います。

用語説明

注1　BBS（Bulletin Board System　ビービーエス）
「電子掲示板」。参加者全員が読み書きできる電子的な掲示板機能。

注2　ハンドルネーム
インターネットなどで使われるペンネーム。

注3　ユビキタス
同時に、どこにでもある、ということ。ユビキタスーコンピューティングとは、コンピュータを意識することなく現実生活のいたるところで利用できるような環境をいう。

とさはちきんねっとURL：
http://www.inforyoma.or.jp/tosa8kin/index.html

（かわむらあきこ／富士通株式会社高知支店勤務・『とさはちきんねっと』総括）

土佐の一絃琴

近森律子

土佐の一絃琴は、幕末の頃京都の土佐藩邸に勤務していた山北の郷士、門田宇平（本名利実）が、正親町中納言家の一絃琴師範代を命ぜられていた真鍋豊平に学び、安政六年（一八五九）、任を終えて帰郷し、高知城下に近い小高坂村（現西町）に居を構え門を開くことにより始まったものである。

当時の土佐藩では、箏の琴は盲人でなければ弾くことを許されなかったため、この小琴の許可によって多くの人がたしなむ機会を与えられたといわれている。宇平の門弟には男性の奏者が多く、勤皇の志士たちの談合の場にもなったようである。江戸末期の激動の時代を思えば、これまたうなずけるものもあろう。

宇平の教授は短く四年足らずで終わったが、男性奏者に交じり千屋克（後の島田勝子）という少女の姿もあった。宇平亡き後は門弟により継承され、克も松島有伯や真鍋豊平にも教えを受け、次第に技を深めていった。

勝子は明治八年、島田直治と結婚、恵まれた家庭と夫直治の協力のもと一絃琴の指導を始めた。明治中期のことである。勝子のもとに集った子女は多く四百名を数え、土佐における第一人者となったばかりでなく、全国にもその名を知らしめることとなった。

明治三十二年十一月、勝子は音楽改良の目的で「高知清風会」を組織しその幹事に推された。続いて、明治三十四年六月に「一絃琴正曲譜本」を編集出版した。その序文に、「世に猥りなる物の音ひなびたる歌声のきこえぬやう、且は世の風をも人の心も正しきに趣かしむべき一ふしにも……」と述べているように、一絃琴に対する勝子の並々ならぬ思い入れを読みとることができる。この譜本に収められた四十二曲は、高尚優雅で文学的・音楽的価値の高いものばかりを選定している。現在の白鷺会の唯一の教科書でもある。この譜本の開帳式は、多数の門人並びに招待の賓客の集うなか盛大を極めたという。

この式典に門人総代として祝文を朗読しその大任を果たしたのは、大西久寿栄（後の秋沢久寿栄）であった。

島田邸の子女（明治39年）

勝子の一絃琴指導は大変きびしかったようであるが、当時の島田家は上流子女の集まるサロンであり、多分に礼儀作法も一絃琴を通して指導された感を深くするものである。

明治四十一年、最大の協力者であった夫直治が逝去した。直治の死は勝子にとってこの上ない衝撃であったであろう。以来琴の指導をひかえ、娘寿子の養育に半生を捧げた。

勝子は明治・大正・昭和と生き、昭和五年三月、七十九歳の生涯を終えた。

島田家は当時中島町（現在の本町NHK高知放送局付近）に宏壮な邸宅を構えていたが、昭和二十年七月の空襲ですべてを焼失した。幸いに一絃琴指導のための一棟は、戦火を避けて城北町に移築していたため焼失をまぬがれ、戦後五十余年の今も昔のたたずまいをそのままに歴史の中に生き続けている。貴重な文化遺産ではなかろうか。この遺産が永く大切に保存されることを切に望むものである。

昭和26年頃の稽古風景

明治時代の土佐一絃琴は、すぐれた奏者勝子により全国にその名を馳せたが、この勝子を支えたのは一絃琴製作者佐竹卯之助である。卯之助は会心の作品には「高知縣八軒町佐竹卯之助作」の焼き印を押している。百余年を経た今でも卯之助の一絃琴は県内外で時として見られ、装飾をほどこした優美な面は、その絶妙な音色とともに今も愛好者の夢をさそう幻の楽器となっている。

昭和二十年八月、ようやく戦争が終わった。焦土と化した高知市に全国に先駆けて文化の灯をかかげたのは勝子の弟子秋沢久寿栄である。昭和二十五年四月「正曲一絃琴白鷺会」を結成した。一絃琴にとってはまさに原始ともいえる時代の中に、生涯をかけて一絃琴の復興と後進の指導に全力を注いだ。久寿栄の活躍はめざましく、その功績により、

- 高知県無形文化財指定
- 文部省記録保存無形文化財指定
- 高知県保護無形文化財指定
- 黄綬褒章
- 勲六等宝冠章
- 高知県文化賞

という数々の栄誉に浴し、昭和四十三年一月、その生涯を終えた。八十五歳であった。

久寿栄亡き後の白鷺会は、昭和四十四年八月、高知県無形文化財の指定を受ける。新しい白鷺会の出発である。

以来、浜口品、稲垣積代、野村敏子と受け継がれ現在に至っている。この間稲垣積代もまた、文部省記録保存無形文化財指定、勲六等宝冠章を受けた。

島田勝子
（『ひとすじの絃は流れて』より）

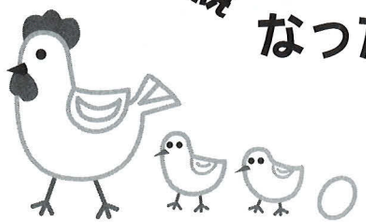
土佐に根づいて百五十年、島田勝子、秋沢久寿栄と時代は異なるも二人の女性がかけた一絃琴への夢は、今も白鷺会員の心の中にふつふつとたぎるものがある。

平成十二年、白鷺会も、高知県文化賞をいただいた。この年は白鷺会創立五十周年にあたる記念の年であった。記念演奏会に続いて白鷺会五十年の歩み『ひとすじの絃は流れて』を発行し、白鷺会結成以来のたくさんの方々に感謝の意を捧げ、先人の残された貴重な文化を次代に送る足がけとした。

移りゆく時の流れは早く、また多様化された現代社会の中ではあるが、私たちはこの伝統ある一絃琴の伝承保存と後継者育成のため、たゆまぬ努力を重ね、より美しいものを後世に託したい。伝承の道に迷いはない。

（ちかもりりつこ／正曲一絃琴白鷺会会長）

ぼくが親になったとき…



佐藤伸治（サトウシンジ）

スピッツというグループの曲に『恋のうた』というのがあり、その中で「君と出会えたことを僕　ずっと大事にしたいから　僕がこの世に生まれてきたわけにしたいから」というフレーズがある。こんな歌のように愛情を注げる相手に巡り会えたと確信できたのは、今から五年前に我が家に生まれた赤ちゃんを前にした時だった。

結婚をして二年目に奥さんのお腹の中に生まれた小さな命。その報を聞いた自分は、喜びとはほど遠い、何とも言えない感情が頭をぐるぐる回っていた。というのも、結婚当初は奥さんに対して「子どもはつくらないよ」と何度も念を押していたからだ。その理由というのも今思えばどうってことでもないのだけれど、「ふたりでいる時間を大事にしたい」とか、「子どもに注ぐ労力やお金を自分たちに向けたい」といった感じで、要約すると「大人になり切れていない（というかなりたくない）自分が親になんかなれるはずがない」の一言につきるかもしれない。

そうはいいながらも大きくなっていく奥さんのお腹。うろたえてばかりいる自分をよそに、少しずつお母さんの顔を見せ始める奥さん。なんだか先を越されているような気持ちと、一番身近で何でも知っているはずの彼女が、当たり前のようにお母さんの顔になることに、不思議な感情を持ってしまったり。そうするうちに大きくなったお腹の内側で元気に動く赤ちゃんが、外からも分かるようになり、今までエコーやカメラで赤ちゃんの存在を説明されていても今ひとつピンとこなかった自分も、やっと父親の自覚の種を持てたような気がした。

出産間近。よし、覚悟はできた。これから必死の思いで出産を迎えるお母さんと赤ちゃんに、直接は何もできないけれど、せめて近くにいて声をかけてあげるぐらいはやらないと。と、何の知識も持ち合わせていないまま立ち会い出産に臨んだ。

夕方に始まった陣痛。慌てふためく自分をよそに落ち着いて準備をする奥さん。まだまだ痛みも弱く、間隔も長いから、急いで病院に行くよりは家にいた方がいいらしい。しかしなぜ彼女はこんなに落ち着いていられるんだろう?と不思議に思っていたのだけど、あとで聞いたところによると、すぐそばで大混乱をしている自分を見て、彼女自身がしっかりしないと、と思ったそうだ。うーむ、とりあえずは逆方向にでも役に立っていたみたいだ。結果オーライとしておこう。

長丁場に備えて体力を保つために一緒にお弁当を食べて、夜十時すぎに産婦人科へ。看護婦さんたちが手際よく、お母さんと赤ちゃんの脈拍・血圧、さらに陣痛の痛みの度合いが分かる測定器をつけ、カーテンで仕切られた大きな部屋で待つ。その部屋には自分たちが入ってから三十分ほどで、また別の妊婦さんが入ってきたりして、お互い和やかな雰囲気だったのだけど、向こうの夫婦がわりとあっさり分娩室に入っていったのに比べ、ウチは子宮口の開き方が小さいと、陣痛促進剤を打たれながら様子を見ることになってしまった。

最初は気丈に振る舞っていた彼女も、延々と続く強い痛みに我慢できなくなって、声を上げて苦しみ、その彼女の腰を強く押しながら「もうすぐで分娩室に入るよ」と言い続けながら、結局そのままの状態で翌日の朝を迎えることに。何の力にもなれずに、根拠のないウソみたいな励ましを続けたこの日ほど、長く感じた夜はなかった。

（続く）

（さとうしんじ）

地域社会の再生と地方自治（一）

市町村合併論議に必要な視点

根小田　渡

このところ新聞の地方版に市町村合併に関する記事が出ない日はない。最近目にした記事のなかに、合併により誕生したばかりのK市のことが紹介されていた。

そこの元合併協議会会長は、合併に進んだ理由について、その地域には「発展の核になる都市がなかった。何とかしないと発展から取り残されてしまうという思いがあった」と述べている。同じ県内でも市が多い地域は人口も多く高速道路の建設といった開発も進んだというのである。「大きいこと（都市ができること）」、「速いこと（高速道路や空港が整備され便利になること）」が「発展」につながるというよくある発想である。

こうした成長型の社会構想を前提とした合併論議は、他のところでも見られるのではないだろうか。高齢社会の到来と人口減少が確実視されるなか、あらためて「発展」とは、「豊かさ」とは何かが問い直され、個性ある地域づくりが模索され始めた時代にあってもなお、かつての経済成長時代の幻影を追い求めるかのような議論が行なわれている。

実は、筆者は高知県の「市町村合併・広域行政検討委員会」の座長を務めたのだが、そのこともあって県内各地の合併論議を見聞することになり、地方自治の現状と将来についてあらためて考えさせられた。

明治以降の近代日本は、時代の節目に二度大きな市町村合併を経験している。近代国家形成期の「明治の大合併」と第二次大戦後の「昭和の大合併」である。そして、今回の「平成市町村合併」もまた国家による強力な指導のもとに、地方制度と地方財政を含めた「地方構造改革」の一環として行なわれようとしている。

政府・総務省の手法は、小規模市町村に対して、地方交付税を削減すると同時にその権限・機能の縮小（準または非自治体案）を示唆する一方、財政特例措置（交付税の算定替や特例債）で合併を誘導するという、およそ「地方分権」時代にふさわしくない旧態依然たるものである。

そうなるのは、合併問題を、もっぱら地方行政経費を縮減しても成り立つ自治体をつくるという「統治の効率化」の観点から考えているからであろう。しかし、自治体は単なる行政サービスの供給主体ではなく、住民が参加する自治の単位、政治の単位でもある。

もちろん、中央政府が行政権限や財源の多くをコントロールし、それを中央省庁と政権党の協調にもとづいて地方に配分するという高度経済成長時代の日本の政治行政システムが行き詰まっていることは誰の目にも明らかである。また、もはや国がメニューとか見本を用意する時代ではなく、地方が地域社会の再生のための知恵や仕掛けを考え出し、それを国が支援していく時代へと転換していかねばならないこともたしかである。

ならば、そういう時代にふさわしい地方自治のあり方とはどういうものか、議論の出発点はそこにおかれるべきである。地方自治体の側では、自治体の事業の見直しから始まって、組織の改革、住民との関係のあり方まで、足が地についた議論が必要であろう。行き詰まったときには原点に戻って考えることが大事である。

合併の是非は、そうした議論を踏まえて自主的に判断されるべきことがらなのである。言うまでもなく、合併は万能薬ではない。地域や自治のあるべき姿の論議よりも、制度・組織の手直しが先行するのは本末転倒である。

（ねおだわたる／高知大学人文学部社会経済学科教授）

高知を撮る

第18回写真コンテスト入賞作品

パレード

（昭和39年　高知市）

川添　宏

高知高校全国野球大会優勝パレード

老人大国

風俗歳時記

総務省の人口推計年報によると、本県の六十五歳以上の高齢者の数は、この十年間年々増加し、昨年十一月現在で、約十九万六千人に達したという。（14・5・24付高知新聞）

全国における本県の相対的な位置を知るために、県が毎年独自に作成している平成十三年度版〈県勢の主要指標〉によれば、〈老年人口割合（65歳以上）〉は、なんと、全国第二位である。

では、全国的視野で眺めた場合、老年人口の現状はいかがであろうか。

最近、和田秀樹・大月隆寛著『完全無敵の老人学』という痛快な書物に出会った。

精神科・老年内科医の和田さんは言う。

「（六十五歳以上を老人とみなす）現在の規準でいくと、日本の老人人口は現在、二二〇〇万人を超したといわれる。人口の一七％、国民の六人に一人がお年寄りという計算になる。」

「日本は世界で一番、平均寿命が長いだけでなく、老人の比率も高く、世界で一番、高齢化のスピードが速い老人大国である。ということは、先進諸国はいくらか遅れて、目下独走状態の日本を追いかけることになる。」

そこで、和田医師は、この世界最高速高齢化を逆手にとって、世界の高齢社会のモデルを作ることが、二十一世紀に日本ができる最大の国際貢献ではないかと提唱する。

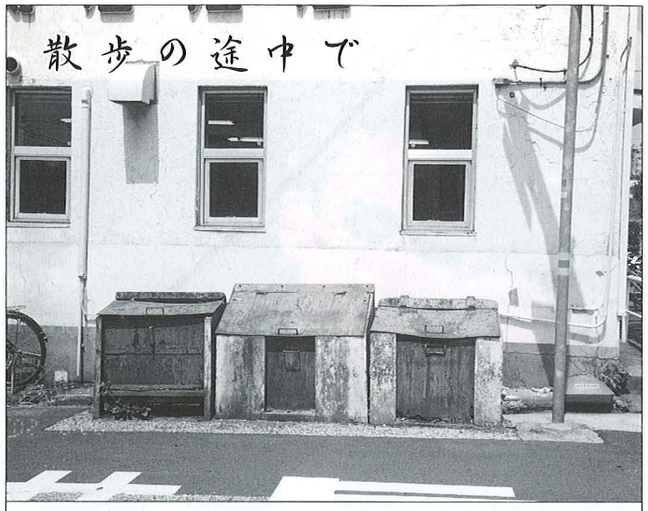
和田医師は三つのモデルを提案しているが、そのなかの一つに〈老人向け商品モデル〉がある。

老人たちが消費者として成熟してゆけば、娯楽・福祉・介護・ハイテク機器などの分野で、さまざまの商品が開発され、有力な未来型輸出産業になるはずである。

事実、大手産業も、すでにシルバー・ビジネスに参入し始めていると聞く。

（朴）

散歩の途中で



白い漆喰様の壁のレトロな倉庫風の建物。そしてその横に、これまたレトロな味のある白と青緑色をしたゴミ箱が並んでいる。天然色（カラー）で見るとなかなかおしゃれ。

人んちのゴミ箱を失礼ながら、と３つとも蓋を開けると、古いながらもしっかり現役で、しかも分別はカンペキ。

こんな風景が街にずっと残ってるといいな。

風伯

手紙

携帯電話が普及し、Eメールが日常化した今日、手紙のやりとりは次第に消えてゆく。ポストを覗いても、DMばかり、信書といわれるものはもの珍しくなった。活字メディアの退潮もあり、文字に親しむという文化の未来は暗い。

それにしても、かつては一世一代の英智？をしぼり、それぞれが恋文（ラブレター）の製作に取り組んだものだが、あの次元は何処へいったのだろう。

駆けて帰って、思いの丈を綴り、速達便で投函、それも一日のうちに二回も、という経験を語られる人もいる。書くことによって、イメージが膨らみ、誤解を生んだ結果がこの現実だ、という苦笑いもあるが、一般的にいって書くことは、物事を整理し確かにすると思う。

会話による交流は、反射的に対応する賢さは育てるが、立ち止まって、感じ考える営みには非力だといえよう。書くこと、読むことはその人の品性を物語るものだ。思慮のない衝動的な出来事の多発を見聞きするにつけ、活字文化の大切さを思い合わせている。少なくとも、手紙を貰ったら返事を書く、という最低のマナー位は、失いたくないものだ。

（3）

賛助会員募集中

年会費2000円で
どなたでも入会できます

ご入会いただくと……

「文化高知」を年６回
お手元にお届けします。

事業団発行の書籍を
10％割引いたします。
（事業団で直接お求めの場合）

お申し込みは……
事業団にお電話でどうぞ。
次号に郵便振替の用紙を
同封してお届けいたします。

今号の表紙

「タケストリー」　長田純子

竹はいろいろな表情をもっています。孟宗竹の農具のような荒々しいたくましいもの、細かく編み込まれた緻密で繊細な技のものなど。私は真竹の白いつややかな色と、すずやかな軽さが好きなので、編むことよりも、ひごをのびやかに表情豊かに生かしていきたいと思っています。

もっと現代の生活の中に竹を取り入れてほしいと思って、この竹のタペストリーを作りました。　（おさだじゅんこ）

文化高知 No.109 [隔月発行]
2002年(平成14年)9月1日発行

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5011(代表)/郵便振替01680-5-14869

写真：毎日新聞社／竹内幹

【プログラム】

＜オール・ベートーベン・プログラム＞

ピアノ・ソナタ第17番　二短調「テンペスト」Op.31-2

第1楽章　ラルゴ－アレグロ　第2楽章　アダージョ　第3楽章　アレグレット

ピアノ・ソナタ第31番　変イ長調　Op.110

第1楽章　モデラート・カンタービレ・モルト・エスプレッシーヴォ

第2楽章　アレグロ・モルト　第3楽章　アダージョ・マ・ノン・トロッポ

～ 休　憩 ～

ピアノ・ソナタ第23番　ヘ短調「熱情」　Op.57

第1楽章　アレグロ・アッサイ　第2楽章　アンダンテ・コン・モート

第3楽章　アレグロ・マ・ノン・トロッポ

都合により曲目の変更をさせていただく場合がございますので、あらかじめご了承下さい。

2002.11.27[水] 開場18:30 開演19:00 高知市文化プラザ大ホール

S席¥4,000(¥2,800)　A席¥3,500(¥2,450)　第2バルコニー席¥3,000(¥2,100)　第3バルコニー席¥2,500(¥1,750)　第4バルコニー席¥2,000(¥1,400)

※（　）内の料金は身障者手帳、療育手帳、障害者手帳所持者とその介護者1名の料金で、高知市文化プラザでのみ販売します。※第2～第4バルコニー席についても高知市文化プラザのみの販売となります。

主催：高知市／(財)高知市文化振興事業団
共催：高知新聞社

【前売り券販売所】
高知市文化プラザミュージアムショップ：088-883-5052
高新プレイガイド：088-825-4335
高知大丸プレイガイド：088-825-2191
高知県民文化ホール：088-824-5321
高知県立美術館ミュージアムショップ：088-866-8118

前売り券 好評発売中

【通信販売】直接購入が出来ない方は通信販売をご利用下さい。必ずお電話（088-883-5073）にてご予約の後、郵便振替口座［加入者名：（財）高知市文化振興事業団　口座番号：01680-5-14869］に公演名・券種を明記の上、チケットの合計金額と送料430円を合計した金額をご入金下さい。入金確認後、簡易書留にて発送いたします。

【公演に対するお問い合わせ】（財)高知市文化振興事業団企画事業課　088-883-5071

http://www.i-kochi.or.jp/hp/bunshin　E-mail bunshin@i-kochi. or. jp